Chapter 34 : **穏やかなロマンス**

ブラウザの隅に、こっそりとインディーゲームのアカウントを作ったのは、シャドウナイトプリンスという名前の**ブラッキー**だった。ゲーム内で彼のパートナーになったのは、妻の**エーフィ**。彼女の名前は、サイキックプリンセス。  
ふたりはゲームの奇妙な世界を共に旅し、ブラッキーはタンク兼ヒーラーとして、華麗に敵をなぎ倒すエーフィのサイキックDPSを支えた。見事な連携でゲーム内外においても絆を深めていったふたりは、息子に秘密で夜な夜なプレイし、紅茶を飲みながらブランケットを分け合い、囁くように作戦会議をしていた。

ある日、そのゲームの開発者である**ガラルギャロップ**が、待望のバレンタインイベントを発表した。リアルカップル向けのゲーム内結婚システムが実装され、ブライダルキャリーポーズが無料で解禁されるというのだ。

**ヤミラミ**は興奮気味に飛び跳ねたが、**ゲンガー**は不機嫌そうだった。というのも、彼が待ち望んでいた「トリック・オア・トラップ：ハロウィン再演イベント」がこのせいで消滅してしまったからだ。

一方その頃、**アマージョ**は自分のデスクで浮かぶ謎のラブレターを見つめていた。どうやら**オーロット**がテレキネシスで送ったらしい。開けようとした瞬間、ゲンガーが横からひったくって、声に出して読み上げ始めた。

そして次の瞬間──アマージョのハイキックがゲンガーの股間に炸裂した。

ゲンガーは地面に丸まりながら、「…でも価値はあった」とかすれ声でつぶやいた。隣にいたヤミラミは肩をすくめながらクスクスと笑う。

その様子をゲーム開発ログ越しに見ていたガラルギャロップは、やわらかく微笑みながら呟いた。  
「やっぱり友情って、魔法ね。」

その夜、ブラッキーはゲーム内でも現実でも、ブライダルキャリーでエーフィを抱き上げた。ふたりだけのバレンタイン記念写真として、こっそり保存しておくためだった。

だがその直後、ふたりは思いがけない既視感に包まれる。

自宅の裏庭にあるプール付近で、制服姿のまま**シャワーズ**が、ずぶ濡れの**ブースター**をお姫様抱っこしていたのだ。どうやらブースターが足を滑らせ、溺れかけたところを助けられたらしい。

しかもゲーム内では、ふたりのアバターも同じポーズをとっていた。カップルアカウントのイベント同期機能のせいだった。

エーフィは一瞬だけ瞬きをしてから、静かに紅茶をすすった。  
「私たちの子、昔の私そっくりなヒロイン体質ね。」

ブラッキーは小さく呻いた。  
「この時代、どんどん呪われていくな…」

ゲーム内のユーザー数は突如として急増し、以下の4人の新アカウントが注目を集めた：

* **バンギラス**が「RockZillaMan」として参戦。
* **カヌチャン**は「PikoPikoBonky」で登録。
* **サーナイト**は「LadyKnightFairy」で華麗にログイン。
* **ルカリオ**は「FurrnubisFist」として、渋々参加。

4人ともバレンタインイベントに参加したのは、好奇心…もしくは仲間の圧に屈したためだった。

間もなくして、バンギラスは現実でもゲーム内でも、カヌチャンをお姫様抱っこしていた。彼は堂々と彼女を屋敷の庭やドット絵の夢の世界を連れて歩いていた──そのすぐ隣のサーバーで何が起きているのかに気づくことなく。

一方そのころ、**警察カップル**のサーナイトとルカリオは、逆の構図になっていた。現実でもゲーム内でも、サーナイトがルカリオを抱き上げていたのだ。これは辛いカレーと反応速度テスト、そして失敗した腕相撲によってルカリオが負けた賭けの罰ゲームだった。

ルカリオは顔を赤くして、ため息をついた。  
「…これ、公開しないって話じゃなかったのか。」

サーナイトはウィンクしながら、彼を優雅に抱えたまま浮かせて言った。  
「賭けは賭けよ。それに、あなた、私の腕の中だと可愛いわよ、警察官さん。」

ゲーム内のバレンタイン広場を通りがかった**リーフィア**と**グレイシア**は、学校のイベント映像で**シャワーズ**が**ブースター**をブライダルキャリーしている様子を目撃した。

リーフィアはまばたきをして呟いた。  
「…あの子、想像以上に力持ちだな。」

グレイシアはニヤリと笑った。  
「言ったでしょ？水分トレーニングは裏切らないって。」

その頃、**ニンフィア**は**サンダース**の耳を引っ張って、昼休みに電動キックスクーターを室内で爆走させた罰として再び拘束室へ向かっていた。だがふたりは途中で止まり、ブースターを抱えるシャワーズの姿に目を奪われる。

ニンフィアはにやりと笑った。  
「見なさいよ。あんたの"親友"、ちゃんと運べる人に出会えたみたいね。」

サンダースは真っ赤になって無言。スパークだけが飛んだ。

その光景を再び迷い込んで見てしまった**アブソル**は、静かに息を吐き、肩を落としながら背を向けた。

突然、轟音が響いた──VROOOOM！！

未来的なバイク音とともに現れたのは、**タクシーライダー・ミライドン**。車輪が火花を散らしながら、スタイリッシュに停車する。

**バシャーモ**が手を振って彼を呼び止めた。

「ミライドン、急いでくれ！**バリヤード**がまた銀行襲ってる！ピカチュウからの通報だ！」

ミライドンは黙ってバシャーモを乗せ、そのまま猛スピードで走り出した。彼らはニンフィアとサンダースの頭上を飛び越え、かろうじて二人は避けた。

ミライドンの後方にパトカーのサイレンが響く中、ニンフィアはぽつりと呟いた。  
「今週、カオスすぎない？」

サンダースも小声で返した。  
「…まだ火曜日だぞ。」

静かな守護者アブソルは、後で戻ってきて、シャワーズとブースターに向かってひとつだけ頷いた。それが彼なりの祝福だった。シャワーズは優しく微笑み、ブースターの手を握ったまま答えた。ブースターは照れ隠しにクールぶろうとするも…結果はお察し。

その頃、ミライドンの華麗な登場を見て、アドレナリンが爆発したサンダースは拳を握った。  
「…決めた。俺もああいうカッコいいやつになりたい。」

突然、サンダースは前に飛び出し、ミライドンとバシャーモに追いついた。雷の速さとミライドンのブーストが合わさり、速度は倍増した。

ニンフィアはぽかんとしながら呟いた。  
「今…何が起きたの？」

3匹は一丸となり、バリヤードを路地で追い詰めた。バリヤードはNFTガチャのフォルダを投げつけてきたが、バシャーモがそれをキックで宇宙に飛ばす。

サンダースはとどめの雷撃を食らわせ、ミライドンは完璧なスライドで停車し、彼を「駐車禁止」のネオンサインの下に閉じ込めた。

バリヤードが「ロイヤリティが…」と泣き言を言う中、サンダースは息を切らしながら立ち上がり、ニカッと笑った。  
「決めた。俺、警察になりたい。」

バシャーモは力強くうなずいた。  
「ようこそ、武闘警備隊へ。新人。」

バリヤードは再び法廷に連行された──だが今回は以前と違う。かつてのチープな裁判所はもうない。

そこは大理石の床が輝く壮麗なホール。ティーカップを持った観客たちが座るのは、自販機の椅子ではなく、本物のベルベットチェア。そしてホールを彩るのは、**カヌチャン家の紋章**が織り込まれた豪華なバナー。

この改革は、ガチャ詐欺ではなく、**真のゲーム愛**による倫理的なモネタイズと、WarioWare社のファンたちの支援によって実現した。

玉座のような裁判席から、キラキラと宝石を散りばめたプリンセス風裁判官ドレスを身にまとったカヌチャンが、階段を優雅に降りてくる。その手には、特注のセレモニーボンカンマーがあった。彼女の隣には、スーツ姿のバンギラスが警備として控えている。以前の「コイン投げ事件」の再発防止だ。

バリヤードはゴクリと喉を鳴らした。

ボンッ。

「どうしてここに呼ばれたか、分かってるわよね？」  
カヌチャンは甘く、でも底知れない声で尋ねる。

ボンッ。

バリヤードは涙目で答えた。  
「…すみませんっ、いえ、はい、プリンセス殿下・ごボンカン様…。」

ボンッ。

観客席から拍手。

いくつかの「反省ボンッ」のあと、バリヤードは刑務所ではなく、**バンギラス邸での社会奉仕**に処された。だがその実態は、**薄給の執事**だった。輸入された高級床を磨き、バンギラスの彼女5人にティーを淹れる日々。

彼は毎日、「俺にはもっと…可能性があったのに」と呟く。

だが──壁に飾られた**ボンカンマーの額縁写真**が彼を見下ろすたびに、背筋が自然と伸びた。